



SUSAP In Indonesia

2025 9/7~9/28



インドネシア留学プログラム概要

【期間】2025 年 9 月 7 日～9 月 28 日

【留学先】■マラン国立大学

■スラバヤ工科大学

【内容】

マランでは、3 日間にわたりマラン大学の学生と交流し、インドネシアの文化について学ぶとともに、私たちが日本文化を紹介する活動を行った。伝統文化や音楽など、多様な側面からインドネシアへの理解を深める貴重な機会となった。

スラバヤでは、約 2 週間、スラバヤ工科大学で実施された「CommTECH 2025」に参加し、他国の学生と協働しながら、インドネシア文化のみならず、さまざまな課題解決や言語学習に取り組んだ。参加者は相互理解を通して、多文化共生に必要な視点を養うことができた。



マラン大学での様子

【インドネシアについて】

人口 約 2.8 億人

面積 約 192 万 km²

首都 ジャカルタ

インドネシアは東南アジアに位置し、約 17,000 の島々から成る多民族国家である。

宗教・文化の多様性が大きな特徴で、地域ごとに独自の伝統が見られる。1945 年に独立を果たし、その後のインフラ整備や投資拡大により安定した経済成長が続けている。日本とは経済・文化の面で長く友好関係を築き、多くの分野で交流が盛んである。



飛行機からみたインドネシアの夜景

【マラン国立大学】

マラン大学は教育学部を起源とする総合大学であり、インドネシアにおける先進的教育研究の拠点です。教育学部を起源とし、現在は工学、教育、経済経営、文学、スポーツ科学など 10 学部を擁し、約 4 万人の学生が学んでいます。

【スラバヤ工科大学】

スラバヤ工科大学(Institut Teknologi Sepuluh Nopember、ITS) は、インドネシアの東ジャワ州スラバヤ市にある、有名な工科大学です。1954 年創立の歴史ある国立大学で、情報通信技術分野の研究・教育にも力を入れています。工科大学としては、バンドン工科大学に次いでインドネシア国内で 2 位と評価されています。ICT 分野の研究・教育に注力しており、インドネ

シア政府による支援も行われています。約 9500 人の生徒が学んでいます。



【食事】

インドネシアではイスラム教徒が多い地域ならではのハラール対応の飲食店が中心でしたが、外食に困ることはほとんどありませんでした。料理は香辛料がしっかり効いていて、極端に辛いのか甘い料理が多かったです。

インドネシアにもマックや吉野家、丸亀製麺など日本でも慣れ親しんだチェーン店が点在していることには驚きました。

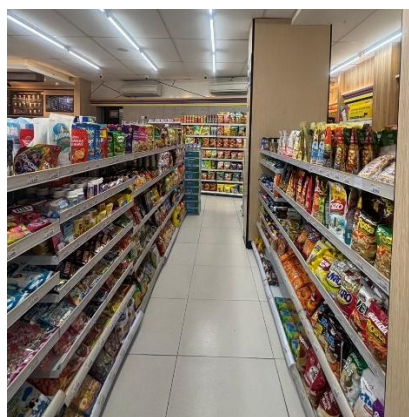
またハンバーガーやチキンなどを頼むと必ずと言っていいほどチリソースが付いてきて、インドネシアならではの味付けを楽しめました。



【市場・物価】

日用品の物価は日本と比べてかなり安

く、ローカル製品であれば 30～50%程度の価格で購入できます。シャンプーやお菓子なども手頃な価格で備えられ、生活費を抑えやすい環境でした。外食も安く、日本円にして 500 円程度でしっかりとした食事をとれます。一方で、輸入品は日本より高くなることが多く、実際、ユニクロや H&M などのファッションブランドでは日本より高い値段で売られていました。



【交通手段】

通学には大学や滞在先が手配したタクシーを利用していました。街中ではバイクの利用者が非常に多く、学生も自分のバイクで登校する姿がよく見られます。また

「Grab」や「Gojek」などの配車アプリが普及しており、タクシーだけでなくバイクタクシーも簡単に呼ぶことができます。遠出や買い物に行く際はこれらのアプリを利用することで、スムーズに移動できました。



【12人のメンバー紹介】

12人の個性豊かなメンバーを紹介します。

【カーン ターシナナビハ】
(理工学部3年)



頼れるみんなのお姉さん。英語力抜群！
「リンゴって好き？」と聞かれたら間違いなくナビハさんである。

【中島大樹】
(教育学部2年)



この愛されプリティーフェイスでみんなの心を掴んじゃうぞ☆精神の持ち主。すれ違うとき絡んでくるので逃げましょう。

【野村紫竜】
(経済学部3年)



おしゃれ番長！ワイルドな見た目とは裏腹に面倒見がよく、話し上手。ハリス（プログラムの責任者）のお気に入り。

【浦脇佑典】
(教育学部2年)



MBTIは寿司職人！この写真を送ってくるのだから尋常な人ではない。いつも穏やかでみんなのボケ担当だよ

【岩根愛奈】
(理工学部 2 年)



初見でわかるエンターテイナー！チョコに憑りつかれていて、インドネシアではチョコ選別に失敗し落ち込んでいた。

【松井士有】
(経済学部 1 年)



何事にも全力なみんなの愛されキャラ。間違いなくお土産を買いすぎていた。インドネシアではよく現地人に間違えられる。

【島内菜央】
(芸術地域デザイン学部 1 年)



1 年生ながらメンバーの中で一番肝が据わっていて全てがイケメンである。菜央ちゃんがいれば彼氏は必要ないだろう。

【井上ことの】
(農学部 1 年)



みんなの癒し担当。ちっちゃくて、ただただかわいいがすぎる。中島大樹だけには辛口である。そこもまたかわいい。

【井手夏歩】
(農学部 1 年)



いつも笑顔で太陽的存在。写真のセンスがピカイチすぎたよ。帰りの飛行機では間違いなく一番元気だった。

【太記寛子】
(芸術地域デザイン学部 1 年)



一見クールだが、かなりノリがいい。夜になるとテンション上がるぜ。ルームメイトの岩根の世話を焼いていたよ。ありがとね

【光安心月】
(農学部 1 年)



プリティー笑顔で疲れを癒してくれる。インドネシア料理にはまり、バイクを乗り回すというワイルドさもあわせもつ。

【五家舞衣子】
(経済学部 1 年)



体調不良者が多かった中、無傷で生還した強靱な免疫とバイタリティの持ち主。かわいい見た目だが、おっさんな一面もある。

【留学成果報告】

「インドネシア留学を振り返って」

理工学部 3 年

カーン ターシナナビハ



私は今回のインドネシアでの留学で感じたことは、大きく二つあります。

一つ目は「人の温かさ」、二つ目は「どのようにしてインドネシアの多文化共生は成り立っているのか」ということです。

これまでも何度か海外に行ったことがありましたが、その中でもインドネシアは特に人の温かさを強く感じました。大学の先生や学生をはじめ、店員やタクシーのドライバーなど、どの人もフレンドリーでとても優しく、笑顔で接してくれました。その笑顔を見るたびに、自然と自分も元気をも

らっていたように思います。

この3週間のインドネシアでのプログラムでは、最初にマラン大学を訪問し、現地の学生と一緒に交流をしました。その後、スラバヤに移動し、スラバヤ工科大学

(ITS) で2週間の「CommTECH

Nusantara2025」に現地の学生とカナダからの学生と参加し、インドネシアでの多文化共生について学びました。

今回の留学で最も印象に残っているのは、ITSでのディスカッションです。イスラム教、カトリック、キリスト教、ヒンドゥー教、仏教のコミュニティに属する学生たちと意見を交わしました。ITSでは、すべての学生がどこかの宗教コミュニティに所属し、それぞれが慈善活動を行ったり、自分たちの宗教について学んだり、他大学との交流を行っています。特に印象的だったのは、どの宗教コミュニティも他の宗教コミュニティと交流していることでした。互いの宗教について勉強し合い、他の宗教のイベントに参加するなど、宗教の垣根を越えて関わっていました。私がディスカッションで質問をしたとき、他の宗教に属する学生が代わりに答えてくれた場面があり、とても驚きました。

日本では、どのような宗教があるのかを学校で学ぶことはあっても、実際に信仰を持つ人々の生活について学ぶ機会はあまり多くありません。そのため、自分と同じ年代の学生が自分の宗教だけでなく他の宗教の人々の生活まで理解している様子を見て、

自分の勉強不足を痛感しました。

これまで私は「人はみんな違う」ということを理解している人がよいと思っていました。しかし今回の交流を通して、それだけでは十分ではないことに気づきました。ただ「違いを受け入れる」だけでなく、「何が違うのか」「なぜ違うのか」を知ろうとすることが大切だと感じたのです。そして、自分と異なる人や文化について知り、理解し、認め、相手の価値観を尊重することこそが、多文化共生の根底にあると実感しました。

インドネシアでは、多様な文化や宗教的背景を持つ人々が共に暮らしています。私は最初、そうした環境の中で育ったからこそ、自然と互いを認め合えるようになっていたのだろうと思っていました。けれども、実際には大学という教育機関が学生に対して、自分の宗教だけでなく他宗教についても学ぶ機会を意識的に設けており、社会として相互理解を促す仕組みを整えていました。

日本では、宗教は非常に個人的なものとされ、オープンに話すことがタブーのように感じられることがあります。しかし、インドネシアでは宗教が人々のアイデンティティの自然な一部として受け入れられています。人々は互いの信仰を認め合い、尊重しています。私は、異なる宗教を知り、尊重することによってこそ、人々はより深く互いを理解し、受け入れられるようになるのだと学びました。多様な背景を持つ人々と共に生きるグローバル社会において、この「相互尊重」の姿勢は欠かせないものであると感じました。また、インドネシアではすべての国民が何

らかの宗教に属しており、その宗教は身分証にも記載されます。宗教が社会において非常に重要な位置を占め、その人の人格や生き方の一部として認められていることを実感しました。宗教を通じた教育や交流の取り組みが、分断を防ぎ、社会全体の調和を支えているのだと理解しました。

今回の留学を通して、私は大学で出会った人々から街中の人々まで、皆がフレンドリーで人の温かさに満ちていると感じました。その温かさは、インドネシア社会が多様な人々の共生の中で培ってきた「他者を尊重する心」から生まれているのではないかと思います。

この経験を通して、私が今後も大切にしていきたいと感じた言葉があります。

それは、「調和は理解と尊重から始まる」という言葉です。

インドネシアでの学びを通して、私はもっとさまざまな価値観や文化を知り、体験してみたいと思うようになりました。自分の知らない世界を知ることに関心が増し、挑戦する意欲が湧いてきました。もともと私は少し安定志向なところがありましたが、この留学を経て自分の視野が広がり、異なる価値観や文化に対してよりオープンな気持ちを持てるようになったと感じています。

今後の課題として、インドネシアで学んだ「相互理解の姿勢」を日常生活の中でも意識的に実践していくことが挙げられます。今回のプログラムのテーマは「インドネシアでは多様な宗教の人々がどのように生活しているのか」でしたが、私たちの身近な社会にも、自分と異なる考え方や背景を持つ人が多くいます。そうした人たちに対し

でも、もっと自由に、もっと気軽に関わっていく姿勢を持ちたいと思います。

佐賀大学には多くの国からの留学生が在籍しており、国際的な交流プログラムも数多くあります。今後は積極的にそうした場に参加し、今回の留学で学んだことを実践していきたいです。自分と違う人々と出会い、理解を深め、尊重し合うことを通して、より広い視野を持つ人間へと成長していきたいと考えています。



「SUSAP インドネシア留学」

経済学部 経営学科 野村紫竜

私は今回の SUSAP インドネシアに参加して、多くのことを学ぶとともに、大きな人生観の変化がありました。今回の留学の主な目的は、英語でのコミュニケーション能力を高めること、そして異なる文化や価値観に触れることで自分の視野を広げることでした。

インドネシアでの生活は、日本とは機構や食文化、宗教観まで大きく異なり、最初は戸惑うことも多くありました。特に、現地の学生たちとの交流では、言語の壁を感じる場面もあったが、互いに英語で意思疎通を試みる中で、伝えようとする姿勢の大切さを強く実感しました。完璧な英語で話すことよりも、「相手に理解してもらいたい」という気持ちが、コミュニケーションを私立させるうえで最も重要であると感じました。

初めに滞在していたマランでは、現地の大学イベントに参加し、異文化交流を通してインドネシアという国について学びました。マランで最も印象に残っているのは、現地の大学生ととても仲良くなり、実際に遊びに出かけたことです。私たちと同年代のインドネシア流の遊び方を教えてくれ、彼らと一晩中遊びました。あの時間は今でも宝物です。マランで過ごした時間は長いものではありませんでしたが、一生の友人を作れたことは、貴重な経験でした。彼らとは今でも電話やメッセージのやり取りをして交流することができています。ここで学んだのは、人と人のつながりの大切さです。日本人でもそうでなくても変わらず、

このつながりは一生の財産になりました。



次に、CommTECH が始まったスラバヤでの生活もとても有意義なものでした。スラバヤでは、多くの寺や教会、モスクなどに行き、宗教について学びました。あまり宗教について考えたことがなかった私にとっては、とても新鮮な二週間でした。実際に ITS の生徒たちと宗教についての意見交換した際には、自分の宗教についてうまく話すことができなかったのが悔しかったのを覚えています。また、プロモ山に登ったり、乗馬をしたりと、とても貴重な体験をすることができたのはとても印象に残っています。

この三週間の経験を通して、語学力だけではなく、異文化への理解や適応力、広い視野が身についたと思います。現地の人の温かさや助け合いの精神に触れ、文化の違いを乗り越えて人とつながる喜びを実感しました。今後はこの経験を糧に、将来の学びや仕事の中でも積極的に異文化交流に関わっていきたいと思います。

24101318 教育学部中等教育主免社会科
二年 中島大樹

私が SUSAP 2025 Summer プログラムに参加した最大の収穫は、「多様性を理解することは、単に異文化を知ることではなく、自分自身の価値観を相対化することだ」と実感できたことである。出発前、私はインドネシアの「多様な文化、宗教、民族性」を理解することが、将来の歴史教育において重要であると考えていた。しかし、実際に現地の人々と交流を重ねる中で、その考えはより具体的で、生きた実感を伴うものへと変わっていった。



スラバヤ工科大学で

の CommTECH プログラムでは、現地学生とのディスカッションやグループワークを通して、宗教や歴史への捉え方の違いに何度も触れた。特に印象的だったのは、第二次世界大戦期の日本の行動に関する話題である。私は日本史を学ぶ立場として説明を試みたが、彼らの語る「被支配の記憶」には、教科書からは感じ取れない重みがあった。相互の理解は簡単ではなかったが、その対話を通して、私は「教える」という行為が一方的なものではなく、「学び合い」であることを強く感じた。

また、イスラム教を中心とした生活様式にも深い印象を受けた。祈りの時間になると誰もが自然に手を止める光景を見て、宗教

が生活に根づくとはこういうことなのだと実感した。私は彼らの生活そのものに触れることで、「宗教＝信仰の違い」という表面的な理解ではなく、人々の生き方を形づくる文化的基盤としての宗教を学ぶことの大切さを知った。

今回の経験を通して、私は「歴史を教える」という目標に対する姿勢が変化した。単に日本の出来事を時系列で教えるのではなく、「他国の視点からどう見えるのか」という問いを常に意識し、生徒と共に考える授業を目指したい。異文化を知することは、他者理解の第一歩であると同時に、自国理解をより深めるための鏡でもある。



帰国後は、学んだ経験をもとに、インドネシアの歴史観や文化の多様性について学内で発表を行い、他の学生と共有する機会を持った。今後も海外の視点を積極的に取り入れ、より開かれた歴史教育を実践できる教員を目指していきたい。



インドネシアの価値観

経済学部 1 年 松井士侑

はじめに私が SUSAP インドネシア 2025 参加した理由はインドネシアを知っているようであり知っていなかったからです。インドネシアが熱帯直下の地域であり、バリ島に代表される世界遺産。また人口は世界第 4 位と多く、イスラム教の人口が多いことは有名です。一方でインドネシアの歴史や文化、自然などは知られておらず、私も詳しく知りませんでした。またプログラムに参加する直前まで私は海外に行ったことが一度しかなく、日本から遠く離れたインドネシアに行くことへの興味もありました。もちろん少し躊躇してしまうこともありましたが、ただインドネシアという国について調べていくうちに日本と異なる多民族・多文化社会というものがどのようなものかという点も気になり参加することになりました。

インドネシアで過ごした約三週間は私にとってかけがえのない日々で驚き、学びの連続でした。まず道路についてです。インドネシアの道路はバイクが多いというのは日本でも聞いていたのですが私の想像以上に多かったです。また道を横断するのも危険に感じました。押しボタン付きの信号で渡った際も車側の信号が赤であるのにバイクや車が進行してきたのは怖く感じることもありましたが、ただ治安が悪いと感じることはなかったです。

そして私が特に話したいのが宗教についてです。日本で生活していると宗教に関心を持っていない人は少なく、深く考えている方は少ないと思います。一方でインドネシ

アの人は宗教というものをアイデンティティとして捉えている人が多くいました。私が特に驚いたのが”What’s your region?”と聞かれたことです。日本では他人の宗教を聞くことは忌避することが多く、宗教が話題になることはなくこのような積極的な姿勢と日本の姿勢は対極的なものと感じました。インドネシアでは国の規定によって 5 つの宗教が公式に認められています。イスラム教、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教、儒教です。国民は 5 つの中から選ぶ必要があるとのこと。また自分の信仰している宗教は ID カードに記載されているということにも驚きました。また大学内の中にも宗教ごとにグループが活動しており、私たちがモスクや寺院を訪れる際には案内してくれる時にはグループの方が案内してくれました。ITS の大学の中の授業で教えてくれたのがインドネシアの宗教の捉え方です。インドネシアでは宗教を認める一方でほかの宗教に対する差別を禁止し、お互いの価値観を認め合うという姿勢が強いように感じました。これは私がモスクを訪れた際やヒンドゥー教の寺院などを訪れた際に強く感じました。一方で自分の信仰に関してははっきりとした主張も持っていることも印象的でした。

インドネシアにいた際の反省点として自分の英語力が上手ではなく、しっかりとしたコミュニケーションができなかったことが課題として上がりました。言語というものは一日ですぐ上達するものではないと改めて痛感しました。言語が通じるとコミュニケーションができ新たな価値観や世界の発見にも繋がると思うので勉強をしていき

いと思います。

日本に帰国した現在私は中国から来た留学生のサポートをしています。日本と中国は隣国であり、文化的にも非常に近い関係といえます。一方文化が近いといっても異なる以上価値観などで差異が生じると思います。価値観を押し付けることなく尊重しながら一緒に過ごしていきたいと思います。最後になりますが、今回の留学は多くの人に助けられながら自分自身成長することができました。本当にありがとうございました。



「訪れてわかること」

農学部 1年 井手 夏歩

私は今回3週間のインドネシアスラバヤ研修に参加して、日本とは全く異なる文化を直接肌で感じ、毎日刺激的な日々を送ることができた。またインドネシアの方々の温かみに触れ、語学力だけでなく、行動力、積極性を成長させることができたと思う。

まず私がこのプログラムに参加しようと思ったのは、英会話能力を向上させたかったからという理由が第一にある。さらに東南アジアを代表する新興国であり、近年目覚ましい経済成長を遂げているインドネシアで、ダイナミックな経済活動、宗教について学びたかったからである。

私はスラバヤ空港に到着して、現地の方が両替の勧誘で話しかけてきたとき、初めての海外ということもありとても驚き恐怖を覚えた。多くの人が私たちのことを興味深そうに観察しており、このような環境で私は3週間過ごしていけるかとても不安だった。しかし、マラン国立大学での交流でその不安は次の日には消え去った。私たちを大きな歓声で歓迎してくれ、日本の文化であるゆかた、折り紙に興味を示してくれてとてもうれしかった。折り紙を教える際、うまく英語で表現することができなかったことがすこし心残りである。

次に、実際に現地に訪れて感じたことを3つ紹介する。

1 大学について

留学前は、インドネシアの大学について大規模な施設や最先端の研究施設は想像しておらず、実際に訪れ、キャンパスの広大さ

に圧倒された。さらに驚いたことは、大学の施設を最大限に利用し、熱心に勉強する学生の姿である。大学を歩けば、パソコンと向かい合い学習をしている学生の姿が見受けられた。スラバヤ工科大学は、名門工科大学であるため、授業や課題の量が多く多忙を極めていた。彼らと机を並べる中で、自分の学習に対する姿勢の甘さを痛感した。また私はその環境を目の前にし、新興国であるインドネシアの背景を感じ取った。大学進学率は低いものの、何十倍という倍率を勝ち抜いて入学した学生たちは、自らが主体となって行動し、「学ぶ機会を得た感謝」と「将来の国や社会を担う使命感」をもっているのだと感じた。

2 都市部と農村部との落差

私が留学の中で、一番気になっていたことである。日本ではあまり経済格差を感じることはないため、とても貴重な経験だった。私たちはマランとスラバヤという都市部に滞在した。生活において不便と感じることはなく、都市部は私の想像を大いに上回っていた。高層ビル、大規模ショッピングモールやチェーン店が建ち並び夜遅くまでにぎわっていた。しかし少し遠出をしはざれた路地などにいくと、座り込んでいる人がいたり、少し衛生面が悪かったりした。本当の農村部などに訪れる機会はなかったが、バスでの移動での外の景色で、格差を感じることもできた。この経験は発展途上国の抱える問題を肌で感じる機会となった。

3 人々の温かみ

インドネシアで生活していて日本人を私たち以外に見かけなかった。それくらい異なる文化や生活をしている国で、私はとても

不安で緊張していた。しかしコミュニケーションをとる中で、皆とても優しく心の温かい人たちばかりで、私のつたない英語を理解しようしてくれた。買い物で迷った際、英語が通じない方だったが、それでも遠くのお店まで案内してくれた。言葉が伝わらない中でも、私のために行動してくれたことがすごくうれしかった。バイクタクシーに乗った際も、温厚な人ばかりで安心して利用することができた。日本の歌やアニメは人気で、コミュニケーションをとる際の手助けとなり、日本の偉大さを改めて感じた。



初めての留学をインドネシアで過ごすことができたことが、私にとって貴重な経験であり、まなびとなった。そして現地の学生さん達から多くの刺激をもらった。この経験が無駄にせず、さらに語学力そして、日本そして世界の様々な面での知識を身に着けレベルアップしていきたい。このプログラムに携わってくださったすべての方々に感謝する。

インドネシアでのカルチャーショック
芸術地域デザイン学部
地域デザインコース1年 太記寛子

この SUSAP を通して様々な経験や学びがあった。今回、この短期留学で得たことをいくつかに分けて述べようと思う。

1つ目は、外国人の授業に対する積極的な姿勢だ。私たちは、CommTECH プログラムでカナダ人3人と出会った。プログラムでは宗教やインドネシア語などを学ぶ座学が数回組み込まれていた。彼らは、インドネシアの生徒や先生が授業内で説明をしている途中でも、積極的に質問をする。質問をきっかけに先生と生徒のディスカッションに発展することもしばしばあった。これは、日本との大きな違いではないだろうか。日本では、先生の話を持断して質問を行うことはあまりない。むしろ話を最後まで聞くようにと注意される場合もある。しかし、海外の授業スタンスは違う。自分の「わからない」を解決することが最も重要なことであり、学びに対して非常に貪欲だ。「わからない」を「わかる」にするため、彼らは自分自身の意見をはっきりもっているのだ。この学びの姿勢は、私も見習おうと思った。少しでも「わからない」ことがあるのならば言葉にして相手に伝える。初歩的なことだが、意外と忘れてしまう。



2つ目は、医療の充実度だ。私は、留学4日目にお腹の調子が悪くなり、最終的にスラバヤの病院に行くことになった。ここで心配だったことは、病院内の衛生管理や環境だった。インドネシアの人々は手術などのよっぽどのことがない限り、病院には行かないそうだ。現地のスタッフさんからは、病院に行くと逆に何かうつされるかもしれないと言われた。私は、いかに日本の医療が整っているのか痛感させられた。結果的に、私は私立の医療設備が整った病院に行くこととなり、無事に回復できた。しかし病院内は、インドネシアで比較的富裕層にある患者さんが多く見られ、医療格差を感じた。やはり、病院によっては医療設備が整っていないところも多く存在している。医療格差はインドネシアが抱える問題の一つであると感じた。



病院内の様子

3つ目は、多様性だ。私は、イスラム系小学校を訪問した際、男女別々で整列するこ

とに驚かされた。しかし、ムスリムの人にとっては宗教に関わる大事なことなのだ。不思議なことに宗教上の理由から男女を分けていても、男女格差を感じることはなかった。私は、日本は男女平等を意識し過ぎているのかもしれないと感じる。男らしさ、女らしさも個々のアイデンティティにおいて重要な事柄だ。このフィールドワークから、個々のアイデンティティとして、もっと男らしさ、女らしさを大事にしてもよいと感じた。



以上から、私は日本の他宗教「共生」の可能性を感じた。インドネシアはイスラム教だけでなく、様々な宗教・少数民族と共存している。個々の宗教・地域を理解し尊重し合う姿はこれからの日本社会の必要なことだ。近年、日本も多くの外国人を受け入れており、確実に多様性が広がっている。その際に大切なことは、相手を排除することではなく、知ろうとすることではないだろうか。日本人は宗教に対して無関心な人が多い。もっと多くの人が宗教に関心を持ち、理解しようとする姿勢が必要だと考える。

約3週間の留学は、他の国では経験できない貴重な時間であった。私は、様々な国を訪れているが、こんなにもカルチャーショックを感じたことは今までなかった。

SUSAP や留学を考える大学生がいるので

あれば、ぜひインドネシアのプロフラムに参加してほしいと思う。

